



帰国隊員の社会貢献・共創に向けて

神奈川県からJICA海外協力隊に参加した人は4,300人を超えています。

開発途上国での活動を通じて、協力隊は自ら課題を設定し、
多様な方々とコミュニケーションを取りながら、
異なる文化や生活習慣の方々と人間関係を構築し
様々な取り組みにチャレンジしました。

その過程において培われた知見や経験は、
帰国後、地域の人々との協力を通じて、
地域が抱える課題の解決に活かされることが期待されています。
そしていま、日本を、神奈川県を元気にするために、
さまざまな場所でその力を発揮しています。

本冊子では、赴任先の国々での活動や経験を、
帰国後の活動にどのようなカタチで活かし、
実践しているのかをご紹介します。

この冊子が皆さまの目に留まり、
新たな連携や共創の芽が生まれることを願っております。



JICA横浜

〒231-000 神奈川県横浜市中区新港 2-3-1

TEL:045-663-3251(代表)

独立行政法人 国際協力機構 横浜センター



2026年3月



Photo: Ken Kato

「映像」と「心」 でつなぐ、 ベトナムと 神奈川県の架け橋。

30歳からの挑戦が、
一生の財産に変わるまで。

01

いなもと ひろこ
稲元 浩子

神奈川県 文化スポーツ観光局国際課
(ベトナム派遣 / 番組制作)

30歳を迎え、自身のキャリアと向き合っていた時期に友人の影響で協力隊に関心を持つ。番組制作の経験を活かせる職種があることを知り応募。2年間ベトナムに赴任し、テレビ局で番組制作支援やアナウンス指導を行う。帰国後、神奈川県庁に入庁。現在はベトナムとの交流事業等に携わっている。



ベトナム国営のテレビ局にて

30歳の節目。迷いの中で見つけた、 「自分だからできること」

番組制作のプロとしてキャリアを積み、30歳を迎え、自身のこれからの目標を見失いかけていた頃、転機はふと訪れました。友人の紹介でJICA海外協力隊経験者の話を聞く機会があり、翌日には説明会に参加していたのです。当初は開発途上国で自分にできることがあるのかという不安もありました。しかし、募集要項の中で目に留まったのは番組制作という職種。制作のプロとして培ってきたキャリアそのものが求められていたのです。これなら、自分も役に立てるかもしれない。そう直感し、トントン拍子に応募を決意。アナウンス指導ができる案件があり、治安が良いイメージもあったベトナムを派遣国に選びました。

「先生」ではなく「仲間」として。 プライドを尊重し、技術と心を重ねた日々。

配属先は、フランス語や中国語などの外国語でニュース発信を行うテレビ局内の日本語番組制作チームでした。そこで私は、20代後半から30代前半の同世代スタッフ5名に対し、企画アドバイスや日本語ナレーションの指導にあたりました。

活動当初、壁を感じたのはスタッフたちのプライドでした。個人プレーに走りがちで、ナレーションも従来のスタイルを踏襲するだけ。自分の言葉で伝えるという意識が薄いように感じられました。そこで私は、「教える・教わる」という上下関係ではなく、同じ番組を作る「仲間」として接することを意識し、自立を支えることにしました。

週1回のアナウンス練習会を開催し、基礎から指導。向上心のあるスタッフには2ヶ月間の特別レッスンも実施し、日本語特有のリズムや間の取り方など、相手に伝わりやすい話し方を目指して、技術的な弱点を補う指導を重ねました。ある時、スタッフが自ら原稿にアクセントやブレスの位置を書き込み、工夫して読んでいる姿を目にしました。「想いが伝わった」そう実感できた、忘れられない瞬間です。帰国後7年経った今でも、元同僚のベトナム人のデスクには私とのアナウンス練習会の教材が飾られ、後輩を指導する際に「ただ話すのではなく、『伝える』んだよ」と伝えたことをしっかり継承していることを聞き、とても嬉しくなりました。

「同じ釜の飯」を食べた絆が、今の仕事の最強の武器になる。

帰国後は、ベトナムで経験した、仕事よりも家族や食事の時間を大切にする文化に感化され、ワークライフバランスを重視する価値観へと変化しました。そんな中、神奈川県がベトナムとの交流に力を入れていることを知り、神奈川県の住みやすさと環境に惹かれ、県の職員採用に応募しました。

現在は、ベトナムと神奈川県の相互理解を深めるイベントの企画やベトナム人向けに神奈川県の魅力を発信する番組制作を担当しています。実は今、協力隊時代のベトナム人の元同僚が日本で立ち上げた会社に番組制作を委託する等、連携することもあり、縁が繋がっています。「どうすれば視聴回数が伸びるか」「ベトナム人の感性にはどう映るか」ビジネスライクな関係だけでなく、かつて現地で同じ屋台の食事を囲み、同じ目線で生活して築いた信頼関係があるからこそ、率直な意見を交わし、より良い作品作りができています。

言葉や文化の壁があっても、相手の背景を理解し、信頼関係を築く力。それはJICA海外協力隊活動で得た最大の財産であり、ベトナムと神奈川県をつなぐ今の仕事の、大きな原動力となっています。



ベトナム初の日本語番組チーム



業務外で子どもたちに日本文化を紹介


ベトナム社会主義共和国

派遣期間 2016年7月 - 2018年7月

シンチャオ
Xin chào

こんばんは

「医療×写真」で、 子どもと家族の 「今」を輝かせる。

ウズベキスタンで見つけた、
生きる喜びを支える魔法。

02

やすた かずき
安田 一貴

放課後等デイサービス・児童発達支援事業所管理者 /
フォトグラファー（ウズベキスタン派遣 / 青少年活動）

理学療法士として大学病院に勤務し、小児がんの子どもたちのリハビリ等を担当。2011年、JICA海外協力隊としてウズベキスタンへ赴任。現地の小児病院で活動を行う。帰国後、国内の国立成育医療研究センター病院等を経て、現在は神奈川県（横浜市）にて障害児支援施設の運営・支援現場に携わるほか、重い病気や障がいのある子どもとその家族を専門に撮影するフォトグラファー、映画製作のスペシャルニーズ・スーパーバイザーとしても活動中。



現地での様子

ウズベキスタン共和国

派遣期間 2011年6月 - 2014年1月

アッ サ ロ ーム ・ ア ラ イ ク ム

Assalomu alaykum

こんにちは

病院を飛び出し、シルクロードへ。

「医療」の枠を超えた挑戦。

「いつか海外で活動したい」20歳の頃、ベトナムを訪問し、現地で戦争の被害を受けた子どもたちとの出会いや、ストリートチルドレンを支援する活動を知って以来、その思いを胸に秘め続けていました。理学療法士の専門学校を卒業後は理学療法士として大学病院に勤務し、小児がんの子どもたちと向き合う日々。そんなある日、転機が訪れます。目にしたのは、かつてシルクロードの要衝として栄えた国、ウズベキスタンの小児病院でのボランティア募集。しかし職種は医療職ではなく、青少年活動でした。医療という枠組みだけでなく、もっと幅広く、自由に子どもたちに関われるかもしれない。自身の医療経験を生かしつつ、新しい関わり方ができるという直感に導かれ、2011年、私は海を渡りました。

「安静」よりも「笑顔」を。

レンズ越しに繋がった、家族の絆と命の記憶。

配属先の病院では、病気の子どもの安静を求める考えが主流で、日本のように遊びや学びの機会をつくることや、成長発達を支援する習慣がありませんでした。そこで、子どもたちのために何かを変えたいという思いから、プレイルームの設置や日本語教室、工作教室などを次々と企画しました。

中でも特に力を入れたのが、家族写真の撮影です。当時はカメラを持っていない家庭が多かったため、親子写真を撮ってプレゼントする活動を始めたのです。当初は存続の危機にあったプレイルームでしたが、帰国から数年後の再訪で、新病棟に「あなたが大切にしていた場所を作ったよ」という医師の言葉と共にプレイルームを目にできたことは、自分の活動の足跡が現地に深く根付いていた何よりの証となりました。

しかし、現実には過酷でもありました。医療環境の違いから、多くの子どもたちが亡くなっていく。「神様の考え次第」という現地の宗教観や価値観に触れ、葛藤しながらも学ぶことがありました。亡くなった後も、私が撮った写真を大切な思い出として飾り続けてくれている。その家族の姿を見て、「思い出を残す」「写真には、家族を支える力、家族と子どもを繋ぐ力がある」とことの重要性を痛感しました。この経験が、現在の活動の原点となっています。

帰国後の使命。「障がいがあるから」を理由に、

当たり前の幸せを諦めさせない。

2014年の帰国後、もう一度、病気や障がいのある子どもたちと関わる仕事をしようと決意。現在は横浜市で、重い障がいや医療的ケアが必要な子どもたちのための施設の運営と現場支援をしています。

同時に取り組んでいるのが、障がい児専門のフォトグラファーとしての活動です。日本でも、重い障がいがあるために家族写真を撮ることやおしゃれをすることといった当たり前の体験を諦めている家族が多い。そう気づいた私は、理学療法士としての知見と、協力隊で培った「写真を撮る」「安心して楽しむことができる環境・空気感を作る」というスキルを掛け合わせ、写真スタジオに行けない子どもたちへの出張撮影を始めました。

「安田さんは、常に障がいのあるご家族に心を寄り添ってくれることが、大きな信頼に繋がっていると思います。障がいのある子を育てる家族の日常を熟知されているからこそ『できないこと』『望んでいること』の課題に向き合い、できるようになるにはどうしたらいいのか？ご自身の経験を活かして取り組んでくださっています。そのおかげで今では多くのご家族に希望を与えていると思います。重い障がいのある子どもたちのかけがえのない命の証を残す活動は、尊いもの。これからも子どもたちの笑顔、そしてご家族の愛情を撮り続けてほしい」と重度障がいのあるお子さんを育てているご家族は言います。

「専門性×〇〇」の掛け算が、未来を拓く。

協力隊は、自分の専門性にもう一つの要素を掛け合わせる「掛け算」を見つけられる場所です。ゼロから活動を作り出したウズベキスタンでの経験は、今の柔軟な発想の土台となっています。

今後の目標は、ヘアメイクや衣装も含めた体験を提供できるバリアフリーなスタジオを作ること。障がいがあっても、おしゃれをして特別な時間を過ごせる。そんな思い出作りの場を実現したいと考えています。帰国後、神奈川県を拠点に日本の子供たちを撮影と支援の両面で照らすことができるような活動をできればと考えています。



小児病院の子どもたち



現地の子どもたちと

スラムの 教室で学んだ

「伝える力」と「待つ心」

ザンビアから神奈川県
の教壇へ、
バトンを繋ぐ。

03

かわい まゆ
川井 真由

神奈川県立相模向陽館高等学校 教諭
(現職教員特別参加制度 / ザンビア派遣 / 青少年活動)

神奈川県内の定時制高校に勤務。小学4年生の時の担任の影響で協
力隊に憧れを抱き、2023年から「現職教員特別参加制度」を利用して
JICA海外協力隊に参加。アフリカのザンビアへ赴任し、首都近郊のス
ラム地域にあるコミュニティスクールで教育活動や学校運営の改善
に取り組む。2025年3月に帰国し、4月より復職。



授業の様子



ザンビア共和国

派遣期間 2023年7月 - 2025年3月

ムリ・ブワンジ
Muli bwanji?

こんばんは

困難を抱える生徒たちと、 途上国の子どもたちを重ねて。

川井さんがJICA海外協力隊を志した原点は、小学4年生の時。担任の先生が語った「いつか途上国で活動したい」という夢の話に、幼心に強く感化されたことでした。

大人になり、教員として神奈川県内の定時制高校で働く日々。そこには、家庭環境や経済的な事情など、様々な困難を抱えながらも懸命に生きる生徒たちの姿がありました。そんなある日、協力隊の募集要項を目にします。「途上国で困難な状況にある子どもたちと関わることは、今の自分の仕事に通じるものがある」。そう確信した川井さんは、教員としてのキャリアを継続したまま参加できる現職教員特別参加制度を利用し、アフリカ・ザンビアへの派遣を決意しました。

スラムの学校で直面した「現実」と、 そこで見つけた「希望」

2023年、川井さんが赴任したのは首都ルサカ近郊のスラム街、ジョージ・コンパウンドでした。配属先は、公立校に通えない貧困層の子どもたちが学ぶ、地域の人が設立したコミュニティスクールでした。

そこで待っていたのは、資金難による過酷な現実です。給料が払えないため先生が定着せず、突然来なくなることも日常茶飯事。自分一人で全学年を見なければならない日もありました。さらに、学校の自立を目指して経営改善を提案する川井さんと、先進国からの金銭的支援を求める校長との間には、埋めがたい価値観の相違もあり、苦悩する日々が続きました。

しかし、そんな環境でも子どもたちは目を輝かせて学び、支え合って生きていました。「環境を言い訳にせず学ぶ子どもたちの姿に、『負けていけない』と逆に励まされました」。川井さんは現地の音大生と協力した音楽の授業や、SNSを活用した学校の広報活動など、自分にできる支援を粘り強く続けました。

「言葉を減らす」授業で、心を通わせる。

2025年3月に帰国し、その翌週には元の定時制高校の教壇に復帰しました。川井さんが勤務する学校は、外国にルーツを持つ生徒が多く通っています。

「ザンビアで英語が通じにくい中、図や絵を使って伝える工夫を重ねました。その経験が今、日本語が苦手な生徒への授業でそのまま活かしています」。言葉だけでなく、視覚的に伝えるスキルは、多様な背景を持つ生徒たちとの架け橋となっています。また、時間感覚がおおらかなザンビアでの生活を経て、自身の指導観も大きく変化しました。「以前は生徒の遅刻にイライラすることもありましたが、今は『事情があるのかもしれない』と一歩引いて待てるようになりました」。その寛容さは、生徒との信頼関係を深めるための、何よりの土台となっています。

教室から広がる「身近な国際協力」

授業でザンビアでの体験を話すと、生徒たちが顔を上げ、食い入るように話を聞いてくれたといいます。自分たちが恵まれていることに気づく生徒や、将来は海外へ行く目標を語る生徒も現れました。

「日本に住む外国の方を支えることも立派な『国際協力』です」。ザンビアで得た広い視野とたくましさや胸に、川井さんは今日も教壇に立ち、神奈川県の子どもたちに「世界」と「つながり」を伝え続けています。



和気あいあいとしたクラス



授業の様子



「食」で
パナマの**笑顔**を守り、
日本の**健康**を支える。

栄養士として、学び続ける
プロフェッショナルへ。

04

しょうの れいみ
庄野 怜美

内科クリニック 管理栄養士（パナマ派遣/栄養士）

国際貢献への関心と栄養士の職種枠があることを知りJICA海外協力隊に応募。2017年から2年間パナマに赴任し、現地NGOで栄養士として活動。現場の調理師と協働し、食文化の壁を乗り越えて子どもたちの栄養改善に貢献した。帰国後、活動で不足を感じた栄養状態の調査方法や公衆衛生学を学ぶため大学院に進学。現在は神奈川県内の内科クリニックで管理栄養士として、糖尿病や高血圧症などの非感染性疾患の患者への栄養相談に従事している。



現地にて食育巡回活動の様子



パナマ共和国

派遣期間 2017年9月 - 2019年9月

ブエナス タル デ ス
Buenas tardes

こんばんは

国際協力への思いからパナマへ。
多様な「食」の現場での挑戦。

子どもの頃から低・中所得国の健康問題に関心があり、大学時代のケニアへのボランティア経験等から、「いつか自分の専門を活かして健康問題の改善に貢献できたら」という思いがありました。JICA海外協力隊の職種には栄養士があったため応募しました。

赴任当初はがんや白血病などの病状を抱える施設の子もたちへのレシピ開発から始まった活動ですが、現地のニーズに合わせてその幅は急速に広がっていきました。治療と向き合う施設の子もたちの保護者への食事アドバイスや栄養セミナーの定期開催、各地の小中学生への食育活動、さらには農村地や企業で働く方を対象に地元の野菜を活用した栄養セミナーまで。パナマの多様な地域で幅広い年齢層の人々の健康を「食」から支える日々に関与しました。



中学校で行った栄養授業

「ジャンクフード」の壁を越えて。
現地の調理師と築いた、信頼のレシピ。

活動の中で最も困難だったのは、食文化の違いと信頼構築でした。パナマでは子どもたちも大人もジャンクフードを好む傾向があり、栄養教育がなかなか定着しないという壁がありました。慣れないスペイン語で、子どもたちや親御さん、同僚たちに栄養セミナーの意義を理解してもらうのも一苦労でした。そこで庄野さんは、まず毎日調理現場に足を運び、現地の調理師と共に働くことで信頼関係を築くことに注力しました。すると、調理師たちも次第に心を開き、アイデアを出し合う協力体制が生まれました。特に印象的だったのは、調理師さん達に教えてもらったパナマの素晴らしい伝統料理を活かしたメニューです。スープやプレートに彩りよく野菜を入れる、生果物ジュースに野菜を加えるなど子どもでも食べやすいメニューに改善することで、子ども達の食事が増えただけでなく、同僚たちのダイエット効果がみられるなど施設全体の健康改善に結びつきました。地元の食文化を否定せず、共に工夫を凝らすことで、壁を乗り越えた瞬間でした。

パナマでの衝撃が、学びの原動力に。
大学院を経て、日本の臨床現場へ。

帰国後、庄野さんはパナマでの活動中に感じた自身の知識不足への悔しさから大学院への進学を選択します。「対象者の状況を正確に把握できる栄養調査の方法を学術的な視点からしっかり学びたい」。その一心で、公衆衛生を専門的に学び直しました。

現在、神奈川県内の内科クリニックで管理栄養士として働く庄野さんが向き合っているのは、糖尿病や高血圧症といった非感染性疾患（NCDs）を抱える患者さんたちです。「パナマで重度の肥満や糖尿病の方々を目の当たりにしたことが、大きな衝撃でした。低・中所得国へ貢献する上でも、やはりNCDsに関する栄養管理を学ばなければならないという意識が強くなり、今の仕事を選びました」。協力隊で培った異なる価値観を持つ相手でも、フラットな目線で意見を尊重し、受け入れる姿勢は、現在の患者さんへの栄養相談にも深く活かされています。



現地で開催した栄養セミナー

絆は海を越えて。
専門性を武器に、次なる国際貢献を目指す。

庄野さんの活動を支えるのは、今も連絡を取り合うパナマの調理師さんたちとの強い絆です。初心に帰らせてくれる、ホッとする時間と語るその繋がり、次なる挑戦へのエネルギー源となっています。

「いつかまた中南米に、何かしらの形で貢献していきたい」。パナマでの現場経験、日本の臨床経験、そして大学院で得た専門知識。これらを融合させ、海外へ向けて日本の食文化や栄養管理について発信したり、コンサルティング的な立場で携わったりすること。庄野さんは今、確かな専門性を武器に、神奈川県から新たな国際貢献の形を見据えています。

アフリカの熱量を 映像で世界へ

ウガンダの人々が輝ける機会をつくる、
恩返しの挑戦

05

かわさきよしひろ

川崎 芳勲

株式会社NeBonga(ネボンガ)代表取締役
(ウガンダ派遣 / コミュニティ開発)

横浜市出身。関西学院大学法学部政治学科(国際政治専攻)卒業後、JICA海外協力隊へ応募。2014年7月から2016年7月まで、ウガンダ共和国ブイクエ県ニエンガ村にコミュニティ開発隊員として赴任。帰国後、民間企業勤務を経てフリーランスのフォトグラファー・映像作家として独立。2023年に株式会社NeBonga(ネボンガ)を設立し、ウガンダでの現地法人設立など日本とアフリカを繋ぐ事業を展開している。



現地にて加工食品販売の活動の様子

どん底で生まれた、 「まだ見ぬ大陸」への恩返しの旅。

高校2年生の時、川崎さんはサッカーのプレー中の怪我で、数ヶ月の寝たきり生活を余儀なくされました。塞ぎ込む日々の中で、ふと思いを馳せたのがアフリカの子どもたちでした。「自分には帰る家があり、食事もある。彼らに比べればまだ恵まれている」。そう気づいた時、まだ見ぬ彼らへの感謝と、いつか恩返しをしたいという強い思いが芽生えたのです。

大学時代は「現場主義」を掲げ、バックパッカーとして世界各地へ。メディアの情報と現地のリアルの違いを肌で感じ、自分の目で見たものだけを信じるという姿勢を確立しました。

卒業後の進路として選んだのは、現地に深く入り込めると感じたJICA海外協力隊。川崎さんは迷うことなく、ウガンダへと飛び立ちました。

「箱」のない活動で築いた信頼。 「4つの卵」が教えてくれた本当の成果。

コミュニティ開発という職種は、学校や病院といった決まった活動拠点がなく、自ら課題を見つけることが求められる仕事です。川崎さんはバイク※で村々を巡り、まずは人々と信頼関係を築くことから始めました。

取り組んだのは、日本の専門家が開発した陸稲(畑で育てる米)の普及や、特産品を使った加工食品の製造販売でした。「そこで稼いだお金で鶏を買い、卵を売る」というビジネスサイクルを伝え、現地の自立を促しました。

活動の中で最も忘れられない出来事があります。帰国直前、共に活動した女性グループのおばあちゃんが、感謝の印として「4つの卵」を差し出してくれたのです。それは、活動を通じて得た収益で彼女たちが買い、大切に育てた鶏が産んだ卵でした。「金銭的な価値以上に、共に流した汗や涙が形になって返ってきたと感じました」。0から1を生み出し、信頼関係が結実したこの経験は、今の活動の原動力となっています。

※現在、バイクは原則貸与していません。

アフリカの才能を覚醒させ、日本と繋ぐ。 映像クリエイターとしての新たな架け橋。

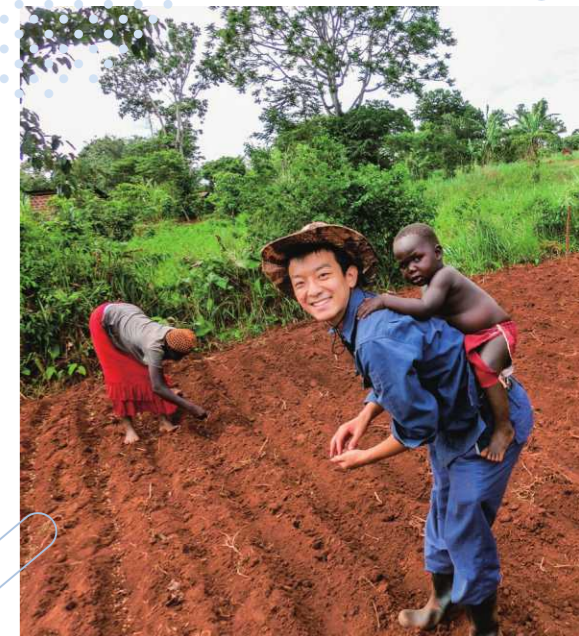
帰国後、民間企業に就職しましたが、「自分らしさとは何か」を考え独立。フォトグラファー、映像作家としての道を切り拓き、2023年に株式会社NeBongaを設立しました。社名は、現地の言葉と「グータッチ」を意味する言葉を組み合わせた造語です。

現在は企業のブランディング映像制作などを行う傍ら、ウガンダに現地法人を設立し、クリエイター育成や機材輸出事業を進めています。「アフリカには眠れる才能(Creativity)がある。学歴に関係なくチャンスを作りたい」。かつて現地の人々から受けた恩を、今度は雇用や機会という形で返す。それが川崎さんの新たな挑戦です。

孤独を恐れるな。マイノリティであることは、最強の武器になる。

これから世界を目指す人へ、川崎さんはこう語ります。

「恐れずに、マイノリティになってほしい。言葉も文化も違う環境で孤独や恐怖を乗り越える経験は、どこでも生きていける自信になります」。



現地にて稲作栽培の活動の様子



現地の生活



ウガンダ共和国

派遣期間 2014年7月 - 2016年7月

ジェバレコ
Gyebale ko?

こんには